

資料紹介

ロートベルトウスの最初の論文
について

吉田茂芳

一九五五年は、ヨハン・カール・ロートベルトウス＝ヤゲツ
ツオウ (Johann Karl Rodbertus-Jagetzow 1805—1875)
の生誕一五〇年と死亡八〇年にあたる。私は、これを機
會に、彼の最初の論文について、ロートベルトウス研究の一資
料として、若干くわしく紹介してみようと思う。

註 死亡七十五年には、しぎの論文が出た。R. Wanstrat,
Johann Karl Rodbertus, zur 75. Wiederkehr seines
Todesstages. In: Schmollers Jb., Bln 1950, 70. Bd, H.
4.

一 ロートベルトウスの最初の經濟學的勞作

一八三〇年代の末に、三〇歳をこえたばかりのロートベルト
ウスは、「國民經濟學を獨自に考ふる」ことを彼に教えた。「四
年間にわたる緊張した國民經濟學の研究」の後、一つの論文を、

資料紹介

當時の一流紙、アウグスブルガー・アルゲマイネ・ツァイトウ
ング (Augsburger Allgemeine Zeitung) に投稿した。彼の
經濟學的研究の最初の成果であった『勞働階級の要求』 Die
Forderungen der arbeitenden Classen (1837?) がそれであ
る。しかしながら、この論文は、アウグスブルガー・アルゲマ
イネ・ツァイトウングに掲載を拒絶され、著者のもとに送りか
えされた。晩年 (一八七二年二月八日)、彼は、このすてに「黄
色くなった草稿」に、鉛筆で修正を加え、——この修正は、し
かし、「わずかのところたりないもの」とA・ワグナーは言っ
ている。——彼の友人、R・マイヤーに送った。マイヤーは、
やらせられ、『ベルリン評論』 (Berlin Review) に送り、そこ
ではじめて公表されるにいたった (一八七二年第六九卷)。

註1 Briefe und Sozialpolitischen Aufsätze von Dr.
Rodbertus-Jagetzow. herg. von Dr. Rudolf Meyer.
I. Bd., S. 168.

註2 私は、この論文の『ベルリン評論』版を見ることができ
ない。私が見ることができたのは、このマイヤーが「ロ
ートベルトウスの死後編集した上掲の『書簡ならびに社會
政策的論文集』に、Fragmente aus einem alten Manus-
cript」として掲載されたものと (II. Bd., S. 575—S. 586)。
T・コックタクとA・ワグナーが編集した『遺稿集』第三卷
(Aus dem literarischen Nachlass von Dr. Carl Rodber-
tus-Jagetzow, herg. von Adolf Wagner und Theophil

一 橋論叢 第三十三卷 第五號

Kozak, Bd. III, Zur Beleuchtung der sozialen Frage. Theil. II, Berlin, 1885.) に再録されたものである。

ワグナーの序文(ワグナー版の194)によれば、マイヤー版におけるこの論文は、『ヘルリン評論』の最初の印刷にもとづいたものであり、「最初のページから、きわめて重要な脱落が見られる」と指摘されている。事實、私のしらべたところでは、三ヶ所にわたり、ワグナー版にして約五ページが脱落している。他方、ワグナー自身は、ローデス・トマスの草稿にしたがったのであるが、最後のほぼ四分の一、「ギンズブルク・モーガンの草稿」がなくなっている。この部分のみをマイヤー版でおき直したとことわっている。しかしこの部分には、マイヤー版の「これほどの部分におけるような脱落があったとは思われぬ」と言っているから(同書 S. 215)「われわれは、このワグナー版における論文を、完全なものと考えてよいであろう。私の紹介は、この版にもとづくものである。」

なお私は、この論文が、最近では、ドイツ敗戦の直前に出た Wegbereiter des deutschen Sozialismus, herg. von E. Thier, Stuttgart, 1943. のなかにも、また「敗戦の直後に出た Sozialökonomische Texte, herg. von A. Skalweit, Heft 5, Frankfurt a. M. 1946. のなかにも入れ含まれていたことを知った。それらにおおつて、この論文がどのように取扱われているか、そのことに興味ぶかしのど

もある。いずれもこのときすでに入手できなかった。

また、この論文は、他の二つのローデス・トマスの經濟學的主要著作とともに、同じのロシア譯がある。すなわち、K. Родбертус: Экономические Сочинения, Ленинград, 1936. がそれである。

この論文について、つきに問題になるのは、それが書かれた年代である。この論文の編集者、マイヤーとワグナーは、いずれもそれを一八三七年としている。ブローラー(G. Adler, Rodbertus, der Begründer des wissenschaftlichen Sozialismus, 1884)もトーマス(H. Dietzel, Carl Rodbertus, Darstellung seines Lebens und seiner Lehre, 2 Bde, 1886—88)もリッパースの『經濟學諸原理』の編集者トナー(E. C. K. Gonner, The Social Philosophie of Rodbertus, 1899)はこれにしたがっている。ところがモシニチは、「二人の編集者は、この論文を、一八三七年に書きあげている。しかしながら、そのなかで、バーミンガムの諸光景が言及されているが、それは、一八三九年に起ったのであるから、この論文は、一八三九年に書くことが不可能である。」と主張する(K. Jentsch, Rodbertus, 1899, S. 14)もトナー(K. Diehl, Rodbertus, Johann Karl, Handwörterbuch der Staatswissenschaften, 4. Aufl. 1926)もリッパース(F. Mehring, Zur neueren Rodbertus Literatur, Die Neue Zeit, XII,

Jahrg. 2. Bd. 1894) は、これにしたがっている。

ここでバレーンガムの諸光景とは、チャーチストの運動の一環として起ったものであるが、この運動についての知識にとほしい私は、この問題を解決することができない。

しかしあとで述べるように、ロッドベルトゥスのこの論文が、直接チャーチストの運動を契機として書かれたものであるという事實を見逃すことさえなければ、メーリングがそれを強調するにもかかわらず(前掲論文)、三七年と三九年のちがいは、さして重要ではないと考える。

ロッドベルトゥスの諸著作のなかで、彼の最初の論文『要求』のしめる位置について、ワグナーは言っている。「この論文から、著者の批判的・積極的な主要諸思想が、ロッドベルトゥスの書物『國家經濟の現状認識のために』Zur Erkenntnis unserer staatswirtschaftlichen Zustände (一八四二年) が世に出されるよりなお数年早く、當時すでに著者によって明確に把握され、かつするどく形成されていたことがあきらかになる。それによって、ロッドベルトゥスに關するもっとも重要な諸思想の先在性(Präexistenz)があらためて證明される。他方、ロッドベルトゥスは、當時彼がなしたげたものを、その後の全生涯では、ただ詳細に發展させているにすぎないこともあきらかになる。」と(ワグナー版 S. 193)。このように、『要求』に重大な意義を認め、そこで示された理論と社會哲學が、その後の全生涯にわたって固持されたとする點では、私の見るこののできた

ロッドベルトゥス研究書のはぼ一致するところである。ロッドベルトゥス自身も言う、「あたかもひとすじの光明のように私の體系が思い浮んだ、その最初から、私は、本質的にはいかなる修正もその體系にほどこすことは不可能であった。」と(Dietzel, *ibid.*, I. Bd. S. 2より引用)。

註1 ロッドベルトゥスの全著作をあげる紙面の餘裕をもたないが、八木助一『ロッドベルトゥス文獻』國民經濟雜誌(神戸高等商業學校商業研究所)第四四卷第二號昭和三年は、著者が、現地ドイツでこの文獻を調査された結果である。その意味で、もっとも正確、完全なものと言えよう。

註2 W. Brauner, Handbuch zur Geschichte der Volkswirtschaftslehre. Ein bibliographisches Nachschlagewerk, 1952. は、外國語譯ならびに最新の資料にくわしむ。また、平瀬巳之吉『古典經濟學の解體と發展——ロッドベルトゥス批判——』昭和五年は、この國でロッドベルトゥスの經濟理論を主題とした唯一の研究書である。

註2 たとえばディーツェルも述べている、「ヤゲッツォウの思想家は、この論文で、彼の體系の根本的な諸特徴を、われわれが彼の劃期的な諸理念の素描を、もっともよくこの『黄色くなった草稿』の内容にむすびつけるほど、それほどどのすどい論證と明瞭な表現をもって述べた。」と(Dietzel, *ibid.*, I. Bd. S. 2)。エェンチュも同じである。「この論文は、ロッドベルトゥスが一生かえることなく思

實に守った根本思想を含む。」(K. Jentsch, *ibid.* S. 14) しかしメーリングは、ことなつた見解をもつ。彼は、有名なマルクス・ロードベルトゥス間のひようせつ問題から、この論文をとりあげているのであるが、ワグナーがいうロードベルトゥスの「批判的・積極的諸思想」のマルクスに對する「先在性」を、論ばくする。すなわちメーリングは、『要求』で提案されたロードベルトゥスの社會改革プランを、ユートピアであるとし、これこそ、「排他的なロードベルトゥスの財産」であるという。そして、この點では、すでにイギリスおよびフランスの空想的社會主義にその先例があり、この論文によつて、とりわけマルクスに對するロードベルトゥスの先在性が、うたがいの餘地もなく證明されねばならぬとは、なんとしても不可解であると結論する。だがメーリングは、主としてこのようなことを前提したうえで、「さてわれわれが、この論文を精密に検討してみらば、ロードベルトゥスが、それを彼の體系の核心として特徴づけることは、まったく正しい。」と述べている (Mehring, *ibid.* S. 525—S. 527)。

二 背景

周知のように、十九世紀初頭のドイツは、なお國土が分裂してあり、政治的にも、經濟的にも、イギリス、フランスの先進諸國にくらべて、いちじるしくたちおくれしていた。すでに産業

革命を経験したイギリスは、農業國から世界の工場にかわり、そこで賃金労働者は、はじめて一つの階級としての意識にめざめ、個々の職業や産業を超えた廣い範圍にわたつて共通の生活目標をもつようになり、それ以前の分散的な労働者の運動にかわる統一的な運動をもつようになった。ところがドイツでは、全人口の八割が農業に従事しており、本質的には、農業國であつた。といつて、もちろん資本主義の萌芽が、まったく見られなかつたわけではないのであつて、古い商業都市や商港都市では、多少ともかなりの資本の餘剰がたれ、また十八世紀以來の重商主義政策によつて、資本の本源の蓄積は、ドイツでも、しだいに遂行されていた。しかし十九世紀初頭のドイツの工業は、主として家内工業であり、手仕事に基礎をおくマニファクチュアがこれにつづき、機械工業は、ずつとおくられていた。地域的には、シュレージンとザクセンの家内工業と、比較的發達していたラインの諸工業が、いうにたる進歩を示していたとどまつた。^{註1}

このような事情のもとでは、労働者の状態といつても、家内工業労働者、マニファクチュア労働者、あるいはなお残存していたツンフトの職人など、まさにロードベルトゥスがいう『勞働階級』が、雜然としていりみだれていたのであつて、労働者の組織的な運動が、チャーチストの運動としてあらわれ、いたイギリスなどは、まったく比較しうべくもなかつたのである。だいたいブルジョアジーそのものが、まだきわめて未

成熟であったのであって、フリードリヒ・リストの活動や生涯を見てもわかるように、このブルジョアジーが、いかにして先進諸國なみに成長するかというところに、當時のドイツの最大の問題があったのではない^{註1}と思われる。

註1 ドイツの經濟狀態については、主として、F. Mehring: *Geschichte der Deutschen Sozialdemokratie*, 2. Aufl. 1903. I. Bd. による。

註2 一八一九年頃から、國內關稅の廢止や鐵道建設など、要するにドイツ・ブルジョアジーが熱望してやまなかつた國內市場の創設のために努力したリストは、ロッドベルトウスの『要求』が書かれた頃には、パリで、『政治經濟學の自然的體系』(一八三七年)を書き、その他の諸論文を、さかんにドイツの新聞雑誌に投稿していた。(Ehebung, List, Friedrich, *Handwörterbuch der Staatswissenschaft*, 1926)

とすれば、ロッドベルトウスがとりあげた労働者の要求は、當時のドイツとしては、一步時代を先んじていた、と言わねばならない。ロッドベルトウスは、晩年(一八七一年一月二九日)、『マイヤーあて書簡』のなかでその論文に言及し、つぎのように述べている。すなわち、「あなたは、何百という労働者が、イギリスの龍騎兵によって斬りたおされたバーノンガムやマンチェスターの血なまぐさい諸場面を、歴史から知¹でしよう。私は、記憶から知るのです！ 私は、當時、私の『初の社

資料紹介

會主義的な論文を、『アウグスブルガー・アルゲマイネ・ツァイトウング』に送りました。……しかし、私が警鐘をうちならした危険が、われわれの社會組織には見いだされないという理由で、その論文は、採用されませんでした。」と(R. II, S. 137—S. 138)。^{註1}

註1 ヌーヴェルも言っている。「ドイツにとっては、この社會問題の取扱いは、一八〇〇年におけるフィヒテの『封鎖國家』と同じように、當時まだあまりにも早すぎた。ロッドベルトウスが道を閉こうとしたプロレタリアの地位の向上や、社會的諸對立の和解とはまったくことなつた目標がわれわれ國民の關心をひきつけた。」(Dietzel, *ibid.* I. Bd. S. 17)「さらにわれわれが、國民經濟の領域で、關稅同盟の狀態や保護關稅か自由貿易かの論争が、主要なる關心を要求したという事情を思い出してみるならば、今日われわれにとってきわめて興味ある論文が、ドイツの第一流の新聞によって拒絶された理由があきらかになる。」と(Dietzel, *ibid.* I. Bd. S. 19)。

かくして、この論文の社會經濟的な地盤は、直接的には、當時のドイツではなく、むしろイギリスに求めらるべきである。チャーチストの運動が、「ヤゲツォウの思想家に筆をとらせた」のである(Dietzel, *ibid.* II. Bd. S. 236)。ロッドベルトウスは、この労働者の運動が、社會の構造を根底からゆるぶるものと感じたにちがいない。『要求』には、最初のページか

ら、このような危機感がみなぎり、プロレタリアによせる彼の正義感が、彼特有の社會哲學でおおわれながら、いたるところで躍動している。

「労働諸階級は、何を欲するか。他の階級は、この労働諸階級が欲するものを、彼らに渡さないでおくことができるだろうか。——労働諸階級の欲するもの、それは近代文明の基なのであるうか。——他日ひじょうな執拗さをもって歴史がこれらを問題にするであろうことを、思慮ある人は、ひさしき以前から知っていたのであり、また平凡な世人も、チャーチストの諸集會やバーミンガムの諸光景によって、そのことを見聞した。」(一九五ページ——以下すべて上掲リグナー版からの引用ページを示す——)

この言葉をもって、ロートベルトゥスは、『要求』の考察をはじめているのである。

三 論文の内容

この論文は、大體において、前半が社會哲學的な考察、後半が經濟理論の展開および改革プランの提示と、二つの部分に分けることができるのであるが、私は、説明の便宜上、後半から紹介することにした。

ロートベルトゥスの資本主義社會——それを彼は、この論文では、『自由交易の制度』あるいは『營業自由の制度』とよんでいるのであるが、——批判の出発點となるものは、労働價值説

と相對的賃金低下の法則である。

労働價值説にかんして、彼は、つぎのように言っている。

「スミスの理論が、とりわけドイツにおいてもまた、いかに歓迎されたかということ、およびすべての價値の基礎および尺度として、全面的な賛成をえたものこそ、主として労働の原理にほかならなかったことは、知られている。クラウス(Kraus)は、このあたらしく發見された原理を、ガリレイ(Galilaei)のもっとも重要な發見と同一視することに躊躇しない。」だがしかし、同時に「かの偉大なスコットランド人のこの點における指示は、「あいまい」であつて、「いちじるしく誤解され、ことなつて理解された。」たとえはセイ(Say)がこれである。「だがイギリス學派は、リカードとマカロツクのもとで、スミスが残した足跡を追求し、労働の原理をあくまで守り、その基礎の上に價値理論をうちたてた。その價値理論は、人間精神が發見したもつとも洞察力あるものに屬する。……そしてこのリカードの理論こそ、それが土地および資本貨料(Grund-und Kapitalrente)の學説につきあたるかぎり、もちろん修正と補充を必要とするのであるが、今日の科學自身が與えた指示として、考察さるべきものにほかならぬ。」(二一九—二二〇ページ)

ロートベルトゥスが、リカードから出發したと言われるのは、この引用であきらかであろう。しかしここでたいせつなことは、ロートベルトゥスにとつて、労働は、「すべての價値の基

「基礎および尺度」であったばかりでなく、さらに進んで、「労働者の所有の要求の基礎」ないしは「所有の配分原理」(二一〇ページ)であらねばならなかった點である。

つぎに相対的賃金低下の法則とは、社會的労働の生産性が増大する場合、資本家、土地所有者の分前が、つねに増加するの反し、労働者の分前が、ほとんど一定していること、したがって相対的には下落することを意味する。どこで一定するかといえば、それは「必要生計」(Notwendiger Unterhalt)である。すなわち、

「……生産性がどんなに思うままの状態にあつても、労働者は、つねに必要な生計の量に制限される。……賃料所有者たちは、一部はすべての財の源泉たる土地を、他の部分は、すべての設備 (Vorräte) を所有することによって、何も持たない労働者……の諸條件を指定する全権力を獲得する。彼らは、彼ら自身の利益において、この諸條件を決定するのである。彼らは、労働者に、労働力を維持し、彼らの子孫を保育するために必要である以上のものを、與えないであろう。すくなくともこの額は、……すべての賃金の重力點 (Gravitationspunkt) にはかならない。」(二一三ページ)

ところでロードベルトゥスは、ここで賃料所有者 (Besitzer des rentierenden Eigenhums) と同じ言葉を使っているが、賃料所有とは、彼が別のところでは言っているように、「労働することなく所有者に賃料 (Rente) を與えるところのもの」(二一

九ページ)である。すでにみたごとく、ロードベルトゥスにとって、労働は、「所有の配分原理」にまで擴張されなければならないのに、にもかかわらず、いかに生産性が増大しても、賃金が必要生計に釘づけされ、所有者は、労働することなく賃料をえるというのであるから、いうところの賃料とは、剩餘價值 (Mehrwert) を意味することはあきらかであろう。もっともゴナーが、この論文は、「二、三の文章のなかで、短く簡単に述べられた剩餘價值學說の核心を含む。」と言っているとおり (Göner, *Ibid.*, S. 6)、それが全面的に展開されるには、なお一八四二年の『現狀認識のために』を待たなければならぬが、それにしても、三〇年代末に、ロードベルトゥスがこの剩餘價值の思想に到達したことは、注目すべきことと思われる。

さてロードベルトゥスは、自由交易の制度は、この賃料所有者の専制を可能にするものだ、と言いきる (二一二ページ)。

すなわちその制度は、労働者に必要生計以上のものを與えないばかりではない。「……景氣の轉換は、所有者に、労働者からその分前すらも奪うことを決心させうるし、すべての人が唯一のたよりとする土地、およびそこですべての人が共同する諸設備から、何も持たない労働者をしめだすこともできるのである。この場合、労働者は、資本家に無條件に屈服しなければならぬ。……」(二一三ページ)「そしてこの制度にもとづけば、年々の多産性 (Fruchtbarkeit) も、人間の獨創性にとつてもっとも偉大な諸發見も、このような労働諸階

「級の狀態を救済することはできない。」(二一四ページ)「その本性上、諸機械の發見以上に、世界を祝福ゆたかに改革しうるものは、なにひとつ存在しない。機械は、いつかは古代に替ける奴隸の地位にすることができ、全人間社會は、古代の自由人の地位をえることができるであろう。だが今日の交易關係のもとでは、このような結果を志向しえない。」(二一五ページ)「この制度のもとでは、…社會の三分の一がルンペンになるにもかかわらず、過剰生産について語らざるをえないのである。」(二一五ページ)

このように、ロードベルトゥスは、「自由交易の制度」を批判したのち、社會組織の改變が必要であると斷定する。彼は、言

「生産性が、すべての階級に多くのものを與えるほど十分大きくないとき」は、労働階級の生計が、必要量に制限されてもやむをえない。古代は、まさにそのような時代であった。「だがしかし、生産性にかんするかぎり、ある階級に、藝術や科學の土臺であるところの富を供給しうるばかりでなく、労働階級にも、必要生計以上のものを與えるほど、それほど生産性の進歩した經濟狀態も、また生じうるのである。このような狀態は、人間が産業上の知識によって自然に對してたまたかいた勝利が、そうするのに十分大きいときに與えられる。この場合において、それにもかかわらず労働階級が、必要生計以上のものを受けとらないとすれば、こ

の原因は、法律のないし國家經濟的な諸制度にあるのであって、社會組織は、ある他の組織に變らなければならぬ。われわれは、ためらうことなく、今日こそそのような場合であると主張する。」(二〇七ページ)労働者の「もっと多くの所有」の要求を、なんら救済しないような「このような法律のないしは國家經濟的諸基礎の上に存続する社會の内部には、まもなく、プロレタリアの一群が形成され、その社會の方式は、このプロレタリアの叫び聲が生じるやいなや、永遠なものではなくて、一時的なものとならざるをえない」であろう。」(二〇九ページ)

かくしてロードベルトゥスは、あたらしい社會構造の敘述に移る。それは、ある程度、自由交易の制度に對する批判から直接演繹されるのであって、あたらしい制度は、「労働階級に必要生計以上のものを與え」(二〇七ページ)「彼らの物質的諸狀態を改善するという一般の見地を固持すべきである。」(二一七ページ)より具體的には、「學業自由の制度が、國家經濟の歴史において過去のものとなり、一つのあたらしい國家管理の制度が權力を擔當する」(二一六ページ)社會である。そして労働が、「所有の構成原理であるばかりでなく、配分原理となる」(二二一ページ)ことによって、賃料所有は廢止され、「土地と資本は、社會の共同財」(二〇九ページ)となる。そればかりではない。彼は、労働貨幣の創設にまで説きおよんでいる。

「もし經濟原理すなわち労働が、リカード學派の發展にお

いて追求されるならば、またもしリカードの眞實價值 (Real worth) の評價が追求されて、その眞實價值が、——固定資本が生産物に移行する部分さえ——労働時間に分解されるならば、そしてさらに、この状態で、労働者の所有要求の基礎となる部分が、まったく同様に費された労働時間のみであり、かつそのことによつて、かくして (財への) 資格および對應する財の量を測定する一つの尺度が與えられると考えられるならば、最後になお一步の前進がおこなわれ、この資格と財の價値の共通の尺度を基礎にして、一つのあたらしい貨幣が創設され、……交易に導入されるならば、……——すべてこれらの指示が、徹底的に追求されるならば、このような状態が、不可能なものや、あるいは生産に不利益になるものを、なんら含んでいないことを承認せざるをえないであろう。(二一〇—二一一ページ)

このように彼は徹底するのであるが、しかしそのすぐあとで、「だが現代は、その状態の實現からあまりにもはなれてい」るから、實現になお長期間を必要とする。「それゆえにわれわれは、現實の地盤におりよう」(二一二—二一三ページ)と言つて、さらに具體的な指示をおこなう。そしてこの場合たいせつなことは、「もっと多くの所有」に重大な制限が課されることである。

すなわちこの場合、「土地および資本所有を犠牲にするのではない。そして實際、犠牲にしない方策がある。すなわち所有權は、たんに實體およびその實體の直接の果實たる生産

物への要求權を本質とするにすぎないのであって、なぜそれが交易において價値をもつにいたるかという。この生産物の經濟的意義は、すでに權利領域の外にある。言いかえると、地代 (Rente des Grundstücks) や資本の利子 (Zinsen des Kapitals) が、いかなる額になるべきかを決定すべきではない。そしてここに、所有權を侵害することなく、労働者に歸屬する國民生産物の部分が増加しなければならぬという、あの要求を満足させようべき餘地がある。(二一七—二一八ページ)

見られるごとく、彼はここで、土地および資本を社會の共同財にすることから後退して、所有權を認めている。ばかりでなく、たとえ權利領域外において、地代や利子が制限されるとはいへ、労働の生産物ではない「生産物への要求權」を認める以上、これは、「賃料所有の廢止」の重大な修正と考えられる。

それはともかく、ロードベルトゥスは、この要求を實現するために、さらに三つの制度を提唱する。一、「労働にもとづくすべての財の法律的な價値決定」二、この價値決定に密接に適合する紙幣、すなわち本來の労働貨幣の創設「三、「商品貯藏制度」がこれである(二二二—二二三ページ)。そして彼は、「さてこれらの指示が、空想的なものと思われるにせよ、思われぬにせよ、上にあげた三つの要求を満足させることは、つねに新時代のもっとも重大な課題、近代文化の死活問題となっている。」(二二三—二二四ページ)とむすんで、『労働階級の要求』を終えてい

る。

四 ロードベルトゥスの社會哲學

ところでロードベルトゥスは、いったん土地および資本の社會化と賃料所有の廢止までとなえながら、なぜ具體的な提案において後退したか。私は、それを彼の社會哲學に由來するものと考へる。以下この點に私の考察を移したい。

ロードベルトゥスは、もつとも一貫した反個人主義者であり、社會哲學の根本原理として、「共同體原理」(Gemeinschaftsprinzip)を核心としていた。

「彼の體系は、もつとも一貫した反個人主義であつた。彼にとつては、個人の意志は、なんら存在せず、社會の意志がすべてである。『個人的諸有機體の多數ではなくして、社會的有機體の統一が優越する。』社會は、『ことなつた經濟的一者の總體』ではなくして、一つの全體であり、それに從屬する部分が、個人である。」(Dietzel, *ibid.* II, Bd. S. 37)『歴史的な生活は、個人主義にも、自由にももつづくものではなくて、諸個人の共同體にもつづくものである。すなわち、諸個人の生活を、あらゆる方面にわたつて——精神的にも、經濟的にも——包括しなければならぬ共同體』は、社會の根本原理である。社會が發展するにしたがつて、この原理の發展的な適用がおこなわれる。……歴史というものは、ますます大きい範圍にむすびつき、ますます偉大な内面に深化す

る一つの統一過程であり、「すべての個人的な生活が、社會的生活に融合する」一つの過程である。……歴史の終局において、歴史の仕事の精華として、『一つの人類の組織』が生じる。統一性は、かくして、そのもつとも高度な完成の段階に到達する。そして社會は、『一つの意志、一つの認識、一つの權力』に人格化 (personifizieren) する。すなわち、『人間の類似體』(Analogon des Menschen) に人格化するのである。」(Dietzel, *ibid.* II, Bd. S. 44—S. 45)——ここでキエーツェルは、ロムンヌトウスの言葉を引用しているが、そのうち Zeitschrift für die ges. Staatswissenschaft, Jahrg. 1874 および Hildebrands J. Bd. IV, V, 1865. に掲載された論文からの引用を、私は、見ることができない。——さて注意すべきは、ロードベルトゥスのこの思想が、彼の種種の書物のなかで、『もろもろのヴェールにつつまれて』説明されているのであつて、『要求』のなかでも、『明瞭な言葉ではどこにも言われていないが、注意ぶかい目で見るとは』それを認めることができる (Dietzel, *ibid.* II, Bd. S. 39) とつづことである。たとへば、

すでに引用したのであるが、「労働諸階級は、何を欲するか、他の階級は、この労働諸階級が欲するものを、彼らに渡さないでおくことができるだろうか。——労働諸階級の欲するもの、それは近代文明の墓なのであるか。——」とロードベルトゥスは言ったのち、「……しかしながら、われわれ

は、最初の二つの問題を、たんにふれておくだけにとどめておく。それらは、権力者に對して脅威的であり、所有階級に對しては、なお一層脅威的である。第三の問題は、科學に關係する。(一九五ページ)と云う。つまりロードベルトゥスは、彼の共同體原理の觀點たる「社會全體の利益」「社會全體の文化およびその發展」という見地からのみ社會問題を見て、それだけを科學の對象にするのである。なるほど「プロレタリアは、彼らの貧窮から解放されなければならない」のであるが、と云って、「プロレタリアのあらあらしいコソシが、諸時代の人人が組みたてた近代文明の建築を、こなごなに破壊してはならないのであって、『社會の利益』がそれを要求するのである。」(Dietzel, *ibid.* II, Bd. S. 39) だからこそ彼は、労働者のもっと多くの所有の要求をすりかえて、つぎのように言う。「ここでわれわれは、『もっと多くの所有』を言いなおして、さしあたりきわめて非黨派的でありたい。すなわちその場合は、——そして威嚇的ではなく——時代の教育程度へのもっと多くの關係を。今日の文化の諸恩恵へのもっと多くの關係を——ということになる。」と(一九七ページ)。あるいはまた、「スマイスの體系があやまりをおかすのは、國民においてではなく、個人においておかすのである。彼の國民結合的な傾向は、まさに彼の榮譽であり、名譽である。」と云って(二一二ページ)、スマイスの本質的でない側面を強調するとき、さきに述べた思想があらわれているものと

資料紹介

思われる。

ロードベルトゥスの共同體思想は、ディーツェルが述べているように、その思想的源流を見る場合に、いよいよあきらかになる。すなわち彼が、『要求』において提唱した國家管理の原理は、オウエン(Owen)やフーリエ(Fourier)の基礎概念となんら共通するものでなく、ヘーゲル(Hegel)やシェリング(Schelling)、シュタール(Stahl)、メールトマン(Dahmann)の國家概念であり、それは、一八三〇年代にドイツで支配的であった社會理論の公式であった(Dietzel, *ibid.* II, Bd. S. 41)。「ロードベルトゥスは、國家經濟を、直接、シェリング—ヘーゲル學派から演繹しているが、この學派は、『個人主義的』集産主義が、原理的にすべての國家干渉を批難しているのに對し、國家というものに原理的にすべての目的を與えている。」「ロードベルトゥスにとっては、國家の再統一が問題であり、……フランスの集産主義者にとっては、社會に對する・個人主義に立脚する主張の實現が、問題なのである。」「ドイツの思想家は、社會問題を、個人の平等(Gleichwertigkeit)の原理からではなく、『古代精神』における『國家共同體の立場』から論じた。」(Dietzel, *ibid.* II, Bd. S. 53)なお、ついでながら、ロードベルトゥスは、このような彼の根本觀に相異する、すべての社會運動や社會主義的思想ないしは黨派を、きびしく否定した。そのことが、彼を、まったく孤立した思想家ないしは社會主義者にしたことは、周知

のとおりである。

しかしながら、彼は、共同體原理をつねに一貫させていたわけではない。同時にフランス集産主義の影響も、あきらかに見られるのであって、たとえば、『要求』のなかでは、つぎのように述べられている。

「勞働諸階級は、今日の社會の諸恩惠によつて、すべての他の階級と同じく、個人的自由と形式的な平等の權利をもっている。しかしそれ以上は、何ももっていないのである！だがそれだけしかもたないとすれば、そのことは、さらに多くをもつことへの永久の内的衝動となるばかりでなく、それへの當然の論理的發展の基礎となるであろう。個人的自由は、たしかに一つの財寶である。だがしかし、さしあたっては、個人の自由裁量にもとづかないところのきょう、幸であるにすぎない。それは、絶對必要な初歩であり、人間にとつて價値あるすべてのものの基礎である。しかしながら、個人的自由それ自體は、その内容を渴望する空虚な天體であるにすぎない。生計をもたない自由人は、『債務者のない債權』と言われたし、またそれ以上うまく言うことはできない。」それゆえに、勞働諸階級が、個人的自由の本質をさとして、彼らは、自由の内容を實現しようとしている、といつて彼らを批難することができるだろうか、と（一九八一—一九九一ページ）。

このように、個人の形式的な自由および平等から出發して、

それを社會的、實質的なところまで擴張する方法は、フランス集産主義者に共通した點であると思われる。それは、「あくまで個人主義的思想の領域に屬する」のである（Dietzel, *ibid.*, I, Bd. S. 26）。思つて、ロード・ベルトウスは、シェリング・ハーゲル的な共同體原理や國家觀を彼の根底にもつていたとしても、ちょうど彼が、イギリスのチャーチストの運動を身をもつて感じたように、社會思想史上、一つの大きい流れであつたフランスの革命的な社會理論を、まったく無視できなかったのではなからうか。この點について、私は、二、三のサマツな點を除いては、まだその全貌をつかむにいたっていない。

つぎにロード・ベルトウスの社會哲學の他の大きい特徴は、彼が社會を改革する場合、その改革は、あくまで共同體原理にもとづき、國家の手による・上からの・社會主義への合法的・漸次的な移行でなければならぬ、とする點である。すなわち彼は、「今日の状態とのあらゆる結合子を缺いているある状態への危険きわまりない飛躍」をはげしくきらつて、『要求』のなかで述べている。

勞働諸階級の「このような要求は、じつさいうれうべきものである。この要求を許すことは、必然的に共和制に導くにちがいないであろうから、かくのごとき統治形態の大變革が、ヨーロッパを不可避的にとおわねばならぬ」ということは、諸個人および諸國民の・あの無数の不幸の原因となるであろう。靜かにあるいは急速に、世界史の發展に役立つ諸力は、

ふたたび無益なわき道に入り、歴史は、苦しいまわり道を、さらにえがかねばならぬであろう。」(一九五—一九六ページ) 今日では、「道徳、科學、機械學における人間精神の進歩は、——われわれは、たんに近代法理念と印刷機を指すにすぎないのであるが、——すでにきわめていちじるしいのであって、人間精神をゆたかにさせるためには、これ以上の精神の發達や政治的な騒ぎを必要としないのである。」(一九六ページ)

ロイドベルトゥスのこうした態度は、當然、土地および資本所有を認めざるをえなくなる。とすると、それは、さきの理論で紹介した、具體的な改革提案での彼の後退と、まったく照應するのである。この點について、メーリングは、きびしく批判している。すなわち彼は、ロイドベルトゥスをマルクスと比較しながら、労働貨幣はもちろん、地代や利潤に親切な顧慮を興え、しかも勞賃を生産性の増大に應じて高めようとしたことを、ユートピアにほかならぬと斷定したうえ、つぎのように述べる。「マルクスは、労働者に旗、し、書くことをもってはじめた。彼は、プロレタリアの政治闘争を組織することをもってはじめた。その闘争を、ロイドベルトゥスは、彼のユートピアによって排除しようとしたのである」と (Meining, ibid. Die Neue Zeit, XII. 2. 1894. S. 527.)。

それはともかく、さらに注目にあたいすることは、この合法的・漸次的な移行が、君主制によって、もっともよく確保され

るとする點である。マイヤーにあてて彼は書き送っている。

「また眞實はこうである。……われわれが、もしいかなる破局にも耐えることを欲しないなら、意識的に完成しなければならぬ社會改革は、君主制の權威のもとで、かつ合法的な進路において、完成されうるであろう。——なぜなら、私は、將來の社會形態では、君主制と社會主義が、自然に一體となることを、……信じているからである。」(R. M. S. 265)

ばかりでなく、ロイドベルトゥスのこの思想は、さらに極端に進む。すなわち彼は、たんにドイツ一國ばかりでなく、世界のすべての國國をも社會主義に導くことをもって、ドイツ君主國の使命であるとした。

じっさいデイツェルも言っているごとく、ロイドベルトゥスによれば、「前世紀において、フランスは、あたらしい理念、すなわち個人主義的理念のトレイガーであった。ナポレオン軍隊のワシは、その個人主義的理念を、翼のせて世界中へはこんだ。しかしながら、……現代の發展段階に適應した社會主義の積極的な公式を見いだすことは、ホーエンツォーレン帝國の輝かしい『使命』となるであろう。一つのあたらしい社會的な歴史の局面がせまれている。……混とんのなから、社會組織のあたらしい健全な諸形態が成長しなければならぬ。……今日、ローマの後繼者たるドイツ國民は、……古くぼろぼろになった社會的な外被を、平然とぬぎすて

資料紹介

一橋論叢 第三十三卷 第五號

るであろう。……ドイツ皇帝は、社會的階級の和解とあたらしい社會正義の道を、ドイツ國民に示すであろう。そういうことを、ロードネルトッスは期待してゐたのである。」(Dietzel, *ibid.*, II, Bd. S. 92—S. 93) つまり「ロードネルトッスは、もっとも強力な文化國民、上述の彼の意見によれば、ドイツ國民から、社會主義國家への第一歩を、世界市民的な融合過程の第一歩を、すべての他の國に、自由であるいは強制的に従わせることを要求するのである。」(Dietzel, *ibid.*, II, Bd. S. 95)

ところでロードネルトッスのこの君主制の原理は、主として彼の晩年に、彼が『マイヤーあて書簡』のなかで述べてゐるのであつて、一八三〇年末の『要求』では、この思想は見あたらない。したがつてこの論文の紹介において、この點を強調することは、當をえないかもしれないが、しかし、階級的立場にたつことなく、共同體原理やヘーゲル的な國家觀を核心としていたロードネルトッスが、以上のような極端なところにまで發展したことを、すくなくともわれわれは見逃してはならないと考へる。

註 別の時代になると、ロードネルトッスのこの側面のみが強調されて、他のたいせつな側面は拒絶された。すなわち、H. Wagenführ, Carl Rodbertus-Jagetzow. (Hochschule und Anslang, Jg. VII, 1936) がこれである。「われわれは、ロードネルトッスと世界觀的に、政治的に、また經濟

的・社會的にも、おおいに一致する。世界觀的には、公益の無條件的な優先において、總じて、高い共同體使命において、あるいは精神(Gesinnung)の社會主義において、……すなわちそのかぎりにおいて、指導者原理(Führerprinzip)との類似點が生じるのである。」(同書二七二—二七三頁)「他方われわれは、すべての經濟財は、労働のみを費用とするという學説において、ロードネルトッスに賛成することはできない。……労働價值理論は、今日、克服されたものと見なすことが出来る。」(三三三—三三三頁)同じくこのローゲンフェーが編集したロードネルトッス選集(Deutscher Staat und Sozialismus, 1935. (Deutsche Schriften, Bd. IV))は、『要求』をとりあげてはゐるものの、その他の點では、ロードネルトッスの全體主義思想選集といつても、言いすぎではなからう。以上のことは、ちょうど同じ年に、ロシアで彼の主要著作の二つのホン譯が出たのと、まことに對照的である。二つのホン譯書とは、さきにかかげたものと、他の一つは、

K. Родберус. К познанию нашего государственно-хозяйственного строя: пять термин. Ленинград, 1935. がこれである。

四 ちやび

私は、この論文で、ロードネルトッスものつともすべられた點

は、また十分に展開されなかつたとはいへ、彼がリカードの労働價值説から出發して剩餘價値の思想に到達し、その武器でもって、彼のいわゆる「自由交易の制度」を批判し、それを社會主義にむすびつけた點にあると考へる。その點は、メーリングといへども、「ロートベルトゥスが、資本主義的生產方法の本質を、透徹した目をもって見とおし、この場合、しりぞけ！ではなくて、進め！があるばかりだということに發表したことは、じつに意義のある行爲であつた。」(Mehring, *ibid.* Die Neue Zeit, XII. 2. 1894, S. 528)と云つて十分認めてゐる。そして私が見ることのできた研究書は、その意味で、彼を科學的社會主義の創始者であるとしてゐる。^註

註 その一つの例として、アドラーを引用しよう。「ロートベルトゥスとともに、社會主義の歴史におけるあたらしい段階が見いださなかつた。社會主義は、經濟科學との統一點積極的な成果をわがものにし、かつその上に體系を組み立てることを、まだ理解しなかつたのである。」それゆゑに、それまでの社會主義は、「非科學的なものと特徴づけられる。」「ロートベルトゥスは、價値について、スミスとリカードに基礎をおく學說にもとづき、かつ、そこからすべての歸結をひき出してゐると、あきらかに宣言してゐる。彼の經濟的諸問題の取扱ひは、一貫せる研究にもとづく價値ある方法で、現代の社會的諸關係に對する批判の刀をふる

つてゐる。……この瞬間から、社會主義は、一つのエートピアであることをやめる。」(Adler, *ibid.* S. 1)

しかしながら、これに對する例外はメーリングである。「ロートベルトゥスは、ある意味では、たしかにラッサールが言つたように、『偉大なドイツ國民經濟學者』であつた。」とその點は認めるが、「彼の輝かしい側面を知るためには、彼を、マルクスやエンゲルス、あるいはイギリスおよびフランスの社會主義者の著名な代表者と比較してはならないのであつて、彼とともに、同じ條件のもとで働いてゐた、ドイツ經濟學者たちと比較しなければならぬ。」と云つてゐる (Mehring, *ibid.* Die Neue Zeit, XII. 2. 1894, S. 527)。

しかし乍らロートベルトゥスの科學的社會主義には、既に見てきたように、重大なドイツ的限界があることを見逃してはならない。デューツェルは、『労働階級の要求』について、「この勞作とともに、ドイツの社會理念の發展史における一つの新しい段階がはじまる。それまで、一部はフリーエの根本思想によつて支配され、一部は政治的急進主義によつてぎうじられていたドイツ社會理論は、内容においても、形式においても、固有の特色をもつことになつた。」と述べてゐるが (Dietzel, *ibid.* I. Bd. S. 2)、その場合、いうところのドイツ固有の特色とは何であつたであらうか。そこに私は、ふかく考慮されなければならないロートベルトゥス評價の重要な問題があると思へる。

資料紹介